



# 社会科学研究部報

令和5年10月3日訂正版  
浜松市教育研究会 社会科学研究部

## 令和5年度 第2回社会科学研究部 研修会

8月1日(火)に、午前は、4箇所での臨地研修会、午後は、昨年度の実践発表や静岡大学名誉教授の小和田哲男先生による講話を聞く、全体研修会を行いました。

### 1 臨地研修と講話【午前の研修】

#### 〈美術館指導主事講話〉

浜松市教育委員会・浜松市美術館指導主事兼学芸員の島口直弥先生を講師としてお招きし、「子供たちにこそ見せたい！浜松の仏像と教材化の可能性」をテーマに講話をしていただいた。浜松市に現存する仏像について、作られ方や作られた年代などの特徴から、当時の時代背景をイメージすることができた。浜松市周辺は、水辺の仏教文化と山岳の仏教文化が融合している地域であり、バリエーション豊かな仏像が現存している。仏像は、地域を深く理解するためのツールになるとともに、社会科の学習だけでなく、図画工作科や特別活動、総合的な学習などの教材としての可能性も秘めている。子供たちが仏像に出会う機会を設け、仏像のもつ教材としての可能性について研修を深めていきたい。

(文責:瑞穂小 藤崎 卓)



#### 〈浜松市議会〉

普段入ることのできない議場見学と、議会の権限や委員会の役割について市役所職員の方からお話していただいた。市議会は、市長が提案する予算、決算、条例などの市政の重要な事柄を審議し、決定していく大切な役割をもっている。国会の議員内閣制とは異なり、地方自治体では、首長と議員をともに住民が直接選挙で選ぶ、二元代表制をとっている。現在46名の市議がいるが、区の再編に伴い現在定数の見直しを行うか協議が行われているようだ。議員報酬が減るなど予算面でのメリットもあるが、市民の声が議会に届きにくくなるというデメリットもある。市議会について関心や理解を深めることができた。

また、本会議が開かれていない日は、見学も可能だそうだ。ホームページで日程を確認することができ、校外学習の日程を組む際のおおよその参考にもなる。6年生の指導内容「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」の導入や深める場面に活用し、児童にとって身近な民主政治の例として、見学したり、市役所職員への聞き取り調査をしたりして、主体的に学ぶ意欲を高める学習となることが期待できる。



(文責:気賀小 小川 怜志)

### 〈大河ドラマ館〉

現在放送中の大河ドラマ「どうする家康」の浜松大河ドラマ館の見学をした。実際に撮影で使用されていたリアルな浜松城城門や登場人物の紹介や衣装などが展示され、ドラマの中に引き込まれていった。迫りくる武田の脅威や「三方ヶ原の戦い」など、浜松ならではのエピソードの紹介やオリジナル映像を見ることができた。今後の大河ドラマが楽しみになると同時に、子供たちに徳川家康の新たな一面を紹介できるきっかけとなった。

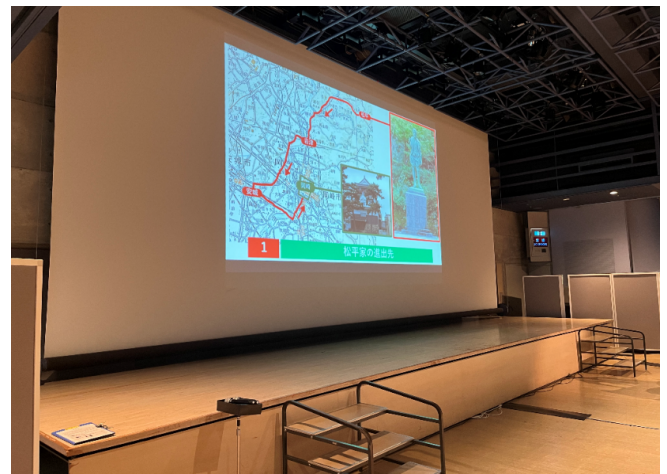


(文責: 双葉小 齊藤 幸宏)

### 〈浜松市中央図書館職員講話〉

浜松市中央図書館アドバイザーの鈴木正之氏から講話「浜松城時代の徳川家康」をしていただいた。鈴木氏は、浜松市史編纂に携わり、「のびゆく浜松」「浜松市の石造文化財」など郷土に関わる多数の本の監修、執筆をしており、浜松の教育に多大な貢献をされている。

今回の講話では、徳川家康が浜松城を居城にした元亀元年(1570)から、駿府城に居城した天正14年(1586)の16年間を中心にお話していただいた。歴史の教科書だけでは知ることのできない家康の半生を様々な地域資料から分かりやすく教えていただいた。当時の家康の情勢や地域住民の家康に対する思いなど解説から、いかに家康が浜松と多く関わっているのかを知ることができた。また通説や新説など、多面的多角的な視点から歴史的事象を見ることができた。この講話を通して、歴史を学ぶ意味を考えられるように指導することの大切さを改めて考えることができた。

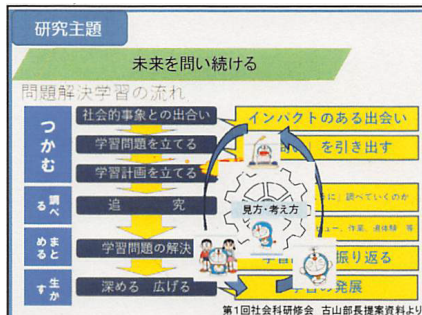


(文責: 与進小 大橋 大二郎)

## 2 実践発表と講話【午後の研修】

### ○実践発表

「意欲的に社会的事象を追究し、未来を問い続ける児童を育てる社会科学習-社会的事象の見方・考え方を働かせる授業づくり-」



井伊谷小学校 山田 航生 教諭

井伊谷小学校の山田教諭より、昨年度の実践が発表された。小学校6年生「歴史と人々の生活」に区分される複数の単元を通して行われた実践であり、以下の4つの手立てを通し、研究主題にある授業づくりを目指した。

#### ① 切実感・必要感のある課題設定

明治の世の中を学習する単元では、導入において、江戸・明治・昭和・平成における学校教育(寺小屋)の様子が分かる資料をそれぞれ提示した。児童はそれらの資料を時代の流れに沿って並び替える活動の中で、江戸から明治にかけて大きな変化があることを見付け、調べたいという意欲を持った。さらに、その変化に社会科の見方・考え方の視点の1つである「時間の経過」を示すことで、短い期間で大きく変化したことを知り、教育が発展した事情の裏にある他国とのつながりや、技術の進歩など、他の視点にも目を向けることになった。児童はますます変化の理由を知りたいという意欲を高め、歴史を学ぶ意味を感じることができた。

#### ② 資料を根拠に自分の考えをもたせる

児童は、社会科を「調べさせられる」「覚えることが多い」教科だと認識していた。それは、これまでの学習が、課題の答えに当たる資料の該当箇所を探す、写すのみの活動となってしまうからだと考えた。そこで、自分の考えを持つことができるように、資料から分かったことと、そこから分かることを、矢印や色分けをしてまとめるよう助言した。

#### ③ 社会的事象を比較したり関連付けたり総合したりする対話の場を設ける

②の考えを、他者と比較したり共通の考えであることを認識できるように、ジャムボードの付箋機能で考えの根拠と自分の考えを色分けしたり、線で囲んでグルーピングしたりしてペアやグループで共有し合った。「予想・調べて分かったこと・考えたこと」について、比較したり関連付けたり総合したりするための対話の場を設けた結果、資料を読み取る技能の高まりが見られ、答えは与えられるものではなく、自分たちでつくるものという意識が高まった。また、新たな課題を見付け、次の学習へのつながりを児童が認識できるようになっていった。

#### ④ 振り返りの場を設定し、自己調整を促す

観点を決めた振り返りシートを使うことで、振り返りの質が高まったり、単元のつながりを意識できたりするなどの効果が見られた。調べて終わりではなく、問い続ける意識も高めることができた。

以上の4つの手立てを通して、児童には、意欲的に社会的事象を追究し、未来を問い続ける姿が見られた。山田教諭が意識した「学びの主語は、子ども」を目指し、社会科における資質・能力を育てていきたい。

(文責:大平台小 古橋 嶺)

## ○講話

### 「浜松城時代の徳川家康と三方ヶ原の戦い」

静岡大学名誉教授 小和田 哲男 氏



#### ◆略歴◆

1944年 静岡市に生まれる

1972年 早稲田大学大学院文学研究科 博士課程修了

2009年 静岡大学を定年退職

現在、静岡大学名誉教授

数々の大河ドラマの「時代考証」を務められ、現在の「どうする家康」で8作品目である。

(引用:小和田哲男オフィシャルサイト)

#### 1. 家康はなぜ遠江国府見付ではなく浜松を選んだのか

今川氏の力が弱くなり、家康は遠江へ、信玄は駿河へ侵攻した。そのため、家康は遠江に城を作る際、見付だと信玄から攻められたときに、天竜川に追い詰められてしまう。だから、天竜川の西側の引馬(浜松)を選んだ。元龜元年(1570)、引馬城を浜松城と改称して岡崎城から移った。

#### 2. 三方ヶ原の大敗北がその後の家康を作った!?

従来の説から有力な新たな説が出てきて、大河ドラマでも使用されている。

武田信玄2万5000の大軍勢で遠州へ侵攻。元龜3年(1572)、武田軍の侵攻ルートは、従来、躑躅ヶ崎館から信濃を通過して、天竜川を南下してきたとされていたが、新説では躑躅ヶ崎館から富士川を南下して、駿河に出て遠江へ入った。家康が籠城しないで出陣した理由は、尾張が攻められないように浜松で止めるようにと信長からの命が下ったため。また、三河には息子の信康がいるため、攻められると困るので、家康は三方ヶ原へ出陣した。武田軍出陣の狙いは、堀江城攻めとする新説もあり。

#### 3. 浜松城時代家康の痛恨事「築山殿事件」

従来の説は、信長からの命令によるものだったが、新説では信長からの命令はなかった。浜松家臣団と岡崎家臣団の軋轢もあったようだ。

#### 4. 織田信長の死と羽柴秀吉との戦い

本能寺の変の後の後継者争いで、兵力の差では家康は秀吉に到底かなわなかった。例えるなら、秀吉は本社の重役、家康は子会社の社長。小牧・長久手の戦いの後、家康は秀吉に臣従して、天正14年(1586)、城を浜松から駿府に移した。

おわりに

家康が江戸に城を移したのは、従来の説は家康が選んだとされてきたが、新説では秀吉が勧めた。家康に小田原城に入られると困ることと、できるだけ遠くに行ってもらいたかったためである。秀頼は当時6才だったが、15才だったら、家康の天下はなかったかもしれない。家康は秀吉との約束を破って天下を取ったため、世間から「うそつ

き「たぬき」と言われているが、当時の情勢でそれもまたやむを得なかったのではないか。今回の大河ドラマではその家康像を打破したかった。

このように、時代考証は、新しい資料が発見されると、これまでにあった複数の資料と結び付けて、新しいものへと書き換えられていく。小和田先生は、今も尚、新しい資料が発見され、考察されることを楽しんでおられる。

また、先生の講話の冒頭に、「教師は、教科を教えるだけでなく、子供の良さを見付けて褒めることが大切。」という言葉があった。小和田先生は、小さい頃から母親の影響もあって、歴史やそれに纏わる本が好きだったそうだが、当時は、人前で話をするのは苦手で、先生と目が合わないように息を潜めているような子供だったらしい。ある時、恐る恐る、知っていることをみんなの前で話した際、先生から「小和田は、歴史博士だな」と褒められたことで、この道に進まれたと、きっかけを語っておられた。

私たちも、小和田先生に夢を与えた教師のように、子供の良さを見付け、学ぶ意欲を持ち続ける現在の小和田先生を見習い、様々な知識や情報を結び付け、楽しみながら教壇に立ちたい。

(文責:豊西小学校 栗田 宗典)

文責:藤野 亜弥・藤崎 卓・小川 玲志・斎藤 幸宏・大橋 大二郎・古橋 嶺・栗田 宗典